

令和7年度三重県農業大学校評価シート

1 設置目的

農業に関する高度な技術及び経営について実践的な教育により、優れた農業経営者等の養成及び農業者等の研修を行うため、三重県農業大学校を松阪市に設置する。(三重県農業大学校条例第1条)。

2 教育方針・研修方針

本県農業及び農村地域の中核的な担い手として、広い視野から判断し、行動できる経営感覚に優れた人材等を養成するため、農業技術の高度化及び経営の革新に対応できる技術能力や経営判断能力、明日の農業を拓くために必要な創造力や実践力などを身に付けることに重点を置いて実践的な教育を行う。

3 本年度に取り組む重点目標

(1)意欲ある学生の確保 (2)学生教育の充実 (3)就農就職支援の強化 (4)農業農村をリードする人材の育成

4 評価項目と具体的方策・評価

重点目標：(1)意欲ある学生の確保

現状と課題	項目	具体的方策と評価指標	取組経過と実績	自己評価	今後の改善方策	学校関係者評価委員会の意見提言
<p>〈現状〉 【農業大学校の魅力発信】 ・定員である二年課程30名、一年課程10名の確保に向けて、高校訪問(年2回)、学校見学会(年2回)、オープンキャンパス(年2回)、SNSによる学校生活の発信などに取り組んできたところです。 ・これらの結果、過去5か年平均で、二年課程は26名、一年課程は11名の入校があり、定員の約9割となっていますが、令和7年度の二年課程入学者は20名となりました。 ・若者層への訴求力が高いInstagramによる発信をR4年度から開始し、R5年度は81回、R6年度は117回投稿しました。 【開かれた学校づくり】 ・当校において、地域住民との接点は、農大祭と農大マルシェ(水曜販売)に限られていましたが、近隣直売所の旬前耕房ごん豆で出張販売を開始しました。 ・同窓会をはじめとする関係者や関係機関との連携を進め、農大と関わりのある人を増やします。</p> <p>〈課題〉 ・農業高校以外からの入校希望者を対象に、農業や農大のカリキュラムに関して、分かりやすく丁寧な発信が必要です。 ・マルシェは地域のシニア層を中心に根強いファンがいるものの、ほぼ固定された客層であり、まだまだ地域住民の認知度が低いため、地域住民の方々に、農大に対する理解を深めてもらう取組が必要です。 ・1424人の農大卒業生の方々にも農大のPRにご協力いただきたいと考えています。 ・本校施設は一般の研修や来客もあり、体育館はマルシェ会場であり、かつ、松阪市の避難所に指定されていますので、施設の老朽化対策を講じておく必要があります。</p>	<p>農大の魅力発信</p>	<p>①オープンキャンパスにおける学生主体の発信の強化 ・オープンキャンパスの専攻紹介や作業説明などの場面で、在校生からの発信に努めるとともに、実習体験時における参加者のフォローも行うことで、入校希望者と学生がコミュニケーションをとれるような場を作ります。(チームウェアの活用も) ☞全専攻で学生からの発信を実施 ②SNS発信の継続・充実 ・キャンパスライフの身近な情報発信を行います。また、学生による発信も推進するとともに、卒業生の現在の様子や水曜販売の案内も紹介し、農大の魅力発信につなげます。 ☞Instagramの投稿回数200回 ③各種媒体を活用した発信 ・学生募集に関して、高校への資料提供、農大HPへの掲載のほか、新聞広告、タウン情報誌、JA広報誌などを活用し、オープンキャンパスや入試の情報を発信します。 ☞学生募集の情報発信10回</p>	<p>①6専攻で学生からの発信を実施(のべ22名) チームウェア着用 ②インスタ投稿回数 202回 水曜販売の案内を開始 ③学生募集の情報発信 中日新聞CM 日本農業新聞 JA広報誌(5誌) タウン情報誌(9誌) オープンキャンパスの情報発信 日本農業新聞 JA広報誌(3誌) タウン情報誌(9誌)</p>	A	<p>近隣住民の方々にもっと知ってもらえるよう情報発信を継続します。 SNSによる発信、学生による発信、各種媒体による発信、近隣の直売所や施設との連携により知名度アップを目指します。 出張販売や地域イベントへの出店で地域の農業者や住民に農大や農大生を知ってもらい、農大の評判を向上させ、受験者数増加を狙います。 卒業生は1400人を超えており、農家実習や学生募集、就職支援など多岐にわたる面でご支援いただこうと考えています。</p>	<p>社協との連携はよい。最近の学生は、指導力が乏しいと感じている。学生が作業を教えるように仕向けると学生の指導力向上にもつながるので検討いただきたい。 農大の学生の中に、自分で実践的なプログラムを構築できる学生がいる。SNS等を作る才能にあふれた子もいるので、学生サークル(動画作成サークル)的なものを立ち上げて、自分たちで情報発信させるのも、良い勉強になる。 景品を付けた広告をインスタに投稿するとフォロワーが100倍に急増した事例があるので、予算があれば何か特典を付けるなどして、より多くの人に農大を知ってもらうこともできると考える。</p>
	<p>開かれた学校づくり</p>	<p>④農大マルシェの認知度アップ ・近隣へのチラシの配布、開催日ののぼりの設置などを通じ、地域へのPRを強化するとともに、地域のイベント等を活用して、地域住民へ農大の存在と商品をPRします。(チームウェアの活用も) ☞イベントでの出張販売、直売所での出張販売6回 ⑤関係機関との連携 ・農業高校との連携活動や地域の関係機関におけるチラシの配布等により農大への関心度向上を図ります。 ☞連携活動10回 ⑥同窓会活動の再開 ・コロナ禍で停止していた同窓会活動を再開し、卒業生どうしの交流を深めます。 ☞会報作成、同窓会総会の開催 ⑦施設の老朽化対策 ・建築物および建築設備の点検を実施するとともに、施設全体の危険個所の有無確認を実施します。 ☞特定建築物定期点検、建築設備定期点検の確実な実施</p>	<p>④出張販売:ベルファーム6/1,10/4,11/2,3/7、嬉野社協(こどもふくりユース)6/15,3/1、JA津安芸11/8、ごん豆11/27,1/29、地方卸売市場9/27 チームウェア着用 出張販売から水曜販売のお客様につながった事例も ⑤連携:四日市農芸、皇学館大学、松阪あゆみ学園、嬉野地域振興局、嬉野社協、直売所、飲食店(おかえり、トライチ、鮎田、たかやま) ⑥40周年以来の55周年記念誌を発行、0年ぶりの総会開催2/28、会報作成 これらの準備ため4回の役員会を実施 ⑦特定建築物定期点検、建築設備定期点検12/23</p>	B	<p>校舎を含め、施設の老朽化がすすんでおり、特定建築物定期点検、建築設備定期点検の結果を踏まえて効果的に修繕を行い、学生が学内で快適に過ごすことができるよう配慮します。</p>	

重点目標：(2)学生教育の充実

現状と課題	項目	具体的方策と評価指標	取組経過と実績	自己評価	今後の改善方策	学校関係者評価委員会の意見提言
<p>〈現状〉 【学生の多様化への対応】 ・学生の中には配慮の必要な学生がいるなど学生の多様化がすすんでおり、進路についても法人就農や民間企業、公務員への就職を希望する学生が増加するなど、学校全体が多様化がすすんでいます。 そこで、そのような状況に 대응できるよう、多様な機関の協力を得て、資質向上研修を行っています。 ・また、急激な社会情勢の変化等に伴い、将来への不安を抱く学生も増えており、令和元年度よりスクールカウンセラーを配置し、随時連携しながら学生指導を行っています。 【卒業論文、プロジェクト(課題解決演習)あり方検討】 ・卒業論文は、就農すると仮定した場合の経営試算がテーマであり、独立自営就農者がほとんどいない二年課程の学生にとっては、自分事としてとらえにくい状況にあります。 ・プロジェクトは、学生の論理的思考、仮説検証力を磨く良い機会となっているが、教育計画のスケジュール上、技術の効果の検証にとどまっています。</p> <p>〈課題〉 ・当校の職員は、教員免許を持っておらず、県内に同様の組織がない等から、職員の資質向上に向けた交流や情報交換の機会がないのが実情です。 ・プロジェクトで取り上げた素材の経営評価を卒論に盛り込むなど、卒論、プロジェクトの連携について、引き続き検討していく必要があります。</p>	<p>学生の多様化への対応</p>	<p>①職員の資質向上 ・ベテラン職員の匠の技の共有や若手職員の学生指導上の課題や悩みの意見交換を通じて指導力向上につなげるOJT研修を実施します。 また、教育の経験のない職員への研修を企画するとともに、三重県高等学校教育研究会農業部会研究大会や学校農業クラブ意見発表会へ参加し資質向上につなげます。 ☞資質向上のための研修、勉強会等、OJT研修:10回 ②特別な配慮を要する学生への対応力の向上 ・スクールカウンセラーとの連携を密に測り、随時相談や意見交換を行います。また、ハローワークや教育委員会などと連携し、学生の家族や出身高校との情報共有も進めながら、職員の対応力の向上を図る。 ☞スクールカウンセラー、ハローワーク、教育委員会との連携(相談、意見交換会など):10回 ③ハラスメント防止対策 ・ハラスメント防止のコンセンサスを経て、ハラスメントのない学校を目指します。 ☞ハラスメント防止の基本方針を策定し、職員と学生に周知します。</p>	<p>①資質向上研修(ハローワーク、皇学館大学、松保健所、農業高校研究会と連携)5回、校内でのOJT研修6回開催し、職員の資質向上を図った。/計11回 ②スクールカウンセラー相談職員7回(学生16回)、ハローワーク講義1回(学生9回)、教育委員会相談2回、障がい者就農促進協議会相談1回、皇学館大学相談1回、岐阜農大相談1回 多様な関係機関と連携し、学生への対応力を磨いた。/計13回 ③ハラスメント防止基本方針を策定・周知 1事案発生も、本人事実確認のうえ、保護者との情報共有および指導により改善</p>	A	<p>配属された教員の状況等を把握のうえ、OJT研修や外部講師による研修を実施します。 学生対応については、引き続きスクールカウンセラーやハローワーク、教育委員会等の関係機関と連携し、相談や助言が受けられる体制を維持する。 障がい者支援事業所や松阪あゆみ学園、嬉野社会福祉協議会との連携で多様化する学生への対応を学び、交流の場を模索する。</p>	<p>普通科高校生が特別支援学校に特別支援学校の学生が普通科高校に行き、お互いの授業を体験することで、先入観をなくして、うまく受け入れができたケースもあるので、参考にしてもらいたい。 外部講師をする際に、配慮が必要な場合は事前に情報共有いただくとごすぐ助かる。今年度は、事前に情報があったため、トラブルを未然に防ぐことができた。</p>
	<p>卒論あり方検討</p>	<p>④卒論とプロジェクトのあり方検討 ・早期からの卒論ガイダンス、農家実習で卒論の素材探索を促すレポートなどを通じ、就職就農先の農業法人における経営改善、プロジェクト素材を柱とした経営試算など、多様な卒論テーマがあることの気付き深める取組を進める。 ・卒論とプロジェクトの連携強化を模索しつつ、卒論のあり方を協議するとともに、令和8年度教育計画へ反映させる。 ☞卒論のあり方検討:3回</p>	<p>④卒論ガイダンス、あり方検討(6/2,9/29,2/16)プロジェクトとの連携は模索しつつも、卒論については現状の型を継続。 統一した型があれば、学生も取り掛かりやすい。また、経営に関する知識は農業以外でも必要になるスキルなので経験してもらいたい。</p>	B	<p>卒論作成の手順把握からデータ収集、営農計画の設定、経営判断等を経て、卒論を完成させること全般について検証、検討を重ねながら、学生により良い経験となるよう進化させていく。</p>	<p>プロジェクトでは、農業を知らない子が農業のいろはを学ぶのにはよい。また、卒論の経営分析については、今、実際に農業者として、従事する中でとても役に立っている。農業者にならないとしても、就職してから役立つと思う。引き続き検討を重ねて欲しい。</p>

重点目標：(3) 就農就職支援の強化

現状と課題	項目	具体的方策と評価指標	取組経過と実績	自己評価	今後の改善方策	学校関係者評価委員会の意見提言
<p><現状></p> <ul style="list-style-type: none"> 農業高校以外からの入校生や農業経験が少ない入校生が増加する中、卒業後の進路については、多様化が進んでいる。さらに、卒業後の農業との関わりについて、明確なイメージが持てない学生が増加しています。 社会情勢の大きな変化から、多様な農業関連企業が当校に関心を示すようになってきています。 そのような状況から、過去5か年平均で、就農率43%、農業関連就職率79%となっており、今年度は、就農率48%、農業関連就職率80%を目指します。 <p><課題></p> <ul style="list-style-type: none"> 本校の設置目的に則し、就農率・農業関連就職率をさらに高めるためには、早期から気付き・学びの場を提供し、学生自らが主体的にキャリアデザインを描くための支援が重要です。 当校に関心を示す農業関連企業との情報交換を密にし、企業が求めている人材象の把握に努めながら、企業と学生のマッチングを進める必要があります。 	<p>進路への早期動機付けによる就農就職率の向上</p>	<p>①就農就職意欲向上のための取組の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> 先進的な農業経営者や同年代の就農を志す学生との交流を深める学外研修等への参加を促すとともに、就農や就職活動を進める際の留意点について気付き深めるガイダンスを実施するなど、就農や就職に向けた意欲向上のための取組の充実を図ります。 そのため、キャリア教育プログラム(「キャリアデザイン」の必須科目化、キャリアコンサルタントによる面談など)、就農ガイダンス、専攻での個別面談、ハローワークによる相談会、意見発表のカリキュラム化などを通じ、将来ビジョンの具体化、就農や就職に向けて支援を継続します。 ☞就職活動ガイダンス:2年課程の1年次及び1年課程に2回 <p>②企業との連携強化</p> <ul style="list-style-type: none"> 農業改良普及センターなどの関係機関との情報交換等により得た情報をもとに、当校に関心を示す農業法人等に対して求人票の提出や企業説明会の開催を働きかけるとともに企業と学生、双方の理解を深めるための機会を設けます。 ☞合同企業ガイダンスの開催:1回 <p>③採用試験対策の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> 近年、希望者が増加している公務員や、昨年度より農大卒が受験資格に加わり関心が高まっている高校実習助手について、卒業生の体験談の紹介等を行うガイダンスを実施します。 ☞夏期集中講座の実施 	<p>①進路決定への早期の動機付けを狙い、1年時を対象にキャリア教育プログラム(10月6日、14日、20日)、就農ガイダンス(4月)、ハローワークによる相談会(4月15日、5月13日、7月8日、9月9日)、意見発表のカリキュラム化(10月10日)を行うとともに、各専攻での個別面談を実施した。</p> <p>学生の中には、早期から企業の就職説明会に参加する等の動きがみられた。</p> <p>②合同企業ガイダンスを開催予定(2月27日)14社がエントリー予定(うち9社は農業法人)</p> <p>③公務員採用試験受験希望者に対し、夏季集中講座(5日間)を実施した。(7月30日、8月6日、8月19日、8月27日)公務員合格者4名</p> <p>就農率51.6%、農業関連就職率74.2%</p>	A	<p>就職活動ガイダンスや合同企業ガイダンスの定着を図るとともに、公務員や高校実習助手の採用試験に向けて集中講座の開催も定着を図る。</p>	<p>農大から公務員を輩出している点については、入校希望者にとって注目ポイントになりうるため、勉強会は引き続き続けていくのが農大としての強みになると考える。</p> <p>進学希望者に対する指導についても検討してほしい。大学によっては、編入試験について、答えてくれる場合もあるため、照会してみてもどうか。</p>

重点目標：(4) 農業農村をリードする人材の育成

現状と課題	項目	具体的方策と評価指標	取組経過と実績	自己評価	今後の改善方策	学校関係者評価委員会の意見提言
<p><現状></p> <p>【みえ農業版MBA養成塾】</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成30年開講以来、農業ビジネスに必要な起業家や農業法人のマネージャー育成を目的として、PRイベントや各種フェアで塾生の募集を実施してきました。 定員(3~5名)の確保が難しく、制度の見直し(半期コースの導入、法人従業員・事業継承者の対象化)を行い、令和6年度は3名の入塾がありました。 <p>【リカレント研修】</p> <ul style="list-style-type: none"> 社会人向けに農耕用牽引車両やアシスト機能付トラクターの操作研修、環境制御システムの技術習得研修など、社会情勢の変化に則した研修を行っています。 一部研修で応募がない状況もありましたが、昨年度は内容のブラッシュアップにより全研修が実施されました。 <p><課題></p> <p>【みえ農業版MBA養成塾】</p> <ul style="list-style-type: none"> 今後の養成塾のあり方や支援体制についてブラッシュアップする必要があります。 <p>【リカレント研修】</p> <ul style="list-style-type: none"> 今後も社会情勢や現場ニーズに合わせた研修内容の継続的更新が求められています。 6月~7月に実施されるリカレント研修では、猛暑下での屋外講習となり、受講者の健康・安全確保が課題となっています。特に、近年の気温上昇傾向を踏まえると、熱中症へのリスク対策が急務となっています。 	<p>養成塾の効果的な運営</p>	<p>①制度の再構築</p> <ul style="list-style-type: none"> 当校の一年課程、農林水産支援センター主催の「みえ農業経営社長塾」との連携をさらに強化し、新規就農者や若手経営者の発展段階に応じた切れ目ない支援体制を構築するため、引き続き、「みえ農業版MBA養成塾」のあり方を検討します。 ☞再構築に向けた検討会の開催(2回以上) <p>②入塾生の確保</p> <ul style="list-style-type: none"> あり方を検討した上で、農業改良普及センターと連携し、法人従業員や親元就農者など入塾候補生に対し、個別訪問を行い、入塾メリットを明確に発信しつつ、入塾生の確保を図ります。 一年課程の在校生のみならず、入校希望者に対しても、一年課程修了後の入塾のメリットを積極的に発信します。 ☞入塾候補生に対するアプローチ 5名 	<p>①8月25日に実行会議を開催し、現状の課題について協議を行った。委員からは「県として育成したい農業者像や想定する経営規模が明確になっていない」等の指摘があり、根本的な制度見直しの必要性を確認した。(2回目は3月24日開催予定)</p> <p>②パンフレット、募集要項を県、国、JAなど関係機関等99か所に配布した。1年課程卒業生1名のほか、7名に対して、個別訪問を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> 桑名市 土地利用型 津市 土地利用型 松阪市 土地利用型 伊勢市 花き 伊勢市 施設野菜※ 伊賀市 果樹+施設野菜 紀宝町 土地利用型 御浜町 土地利用型 	B	<p>①来年度を新制度への「移行期間」と位置づけ、カリキュラムや募集対象の再整理をしていく必要がある。</p> <p>②募集活動は行ったものの定員充足に至っていない。連携していた社長塾が今年度で終了することから、それに代わる研修のあり方についても、関係機関と連携して具体化を図る必要がある。</p>	<p>MBAの存在意義は、単にMBA認定をとることではなく、三重県農業を引っ張る高度な農家を育成することだと考える。</p> <p>MBAという点、とっかかりにくいので、例えば、生成AIを農業現場で使うには、どうすればよいかなど、産学連携の取組みなど、何かしらテーマを設け、最先端農業を行いたい人を集めるのも一つの方策だと考える。</p>
	<p>リカレント研修の効果的な運営</p>	<p>③リカレント研修のブラッシュアップ</p> <ul style="list-style-type: none"> これまでの研修を継続するとともに、昨年度の受講生の意見などを踏まえ、より現場ニーズに即した、かつ、当校で整備した機械等を活用できる新たな研修を検討します。 さらに、当研修に対する潜在的なニーズは高いと思われるため、SNS等を積極的に活用するなど、PR方法も改善し、潜在的な受講希望者へのアプローチを進めます。 ☞新規企画の研修の実施 1件 <p>④熱中症対策の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> 屋外研修における安全確保の観点から、熱中症発生時の対応手順を明文化した「現場対応フロー図」等を作成し、教職員および学生、受講生へ周知徹底します。 ☞熱中症対策を講じた実習運営体制の整備 炎天下でのリカレント研修については、気温が比較的穏やかな時期への開催時期の見直しを含め、受講者の身体的負担軽減につながる運営方法の検証を進めます。 ☞トラクター操作研修時期(6~8月)の夏季を避けた時期への移行と分散 	<p>③就農希望者等のニーズに対応した「援農・就農支援農業技術習得研修」や「就農チャレンジ研修」を実施し、技術習得の機会を提供した。SNS、HPによりPRを行った。受講生へのアンケートを実施し、研修内容や設備利用に関する要望を収集した。新たなリカレント研修として、県移住促進課と連携した「美味し国の農業体験ツアーin三重県農業大学校」を開催し、22名が参加した。1名は次年度入校を希望している。</p> <p>R7短期研修参加者については、3名が、令和8年度農大への入校へと結びついた。</p> <p>④屋外研修における「現場対応フロー図」を作成し、教職員および受講生への周知徹底を図った。東海近畿ブロック農業大学校指導職員技術担当者研修会を開催し、酷暑下での農業実習で実施している酷暑対策等を情報交換した。</p> <p>夏季(6~8月)に集中していたトラクター操作研修等の日程を分散・移行し、8月、9月は研修を行わず、受講者の身体的負担を軽減するスケジュールで実施した。</p>	A	<p>③収集した受講生アンケートの結果を分析し、次年度の研修企画(新規コースの開設や既存コースの改善)に反映させる。特に好評だった実習内容を拡充するとともに、広報手段としてSNS等の活用をさらに進め、潜在的な受講層の掘り起こしを図る。</p> <p>④空調服、無人草刈り機の導入や、「実習現場付近へのスポットクーラーやミストファンの設置など、ハード面での環境改善を検討・実施し、学生の身体的負担の軽減を図る。</p>	<p>現場の要望は、将来的に自分のやりたい農業を実現するには、どのようなことが必要かみたいなイメージだと考える。その為、農大に通って勉強するなどして仕事を辞めてまで、することが困難な人向けに働きながらでも学べる講座にするのも方策ではないかと考える。</p>